

川端文學中的「救贖」

—以關東大地震相關的作品為例—

黃翠娥

輔仁大學日本語文學系 教授

摘要

1923年9月1日的關東大地震，是地震觀測史上第一個死亡人數高達十多萬人的大災難。面對這樣的災難，當時的人們是如何地身心受到摧毀，可想而知。而被視為是最能撫慰失意者心靈的文學作品，這時又發揮了甚麼功能？本研究基於這樣的問題意識，意欲針對川端康成如何記載關東大地震，以及如何發展出超越如此災難所帶來的痛苦的「思想」。

地震發生後，川端康成在〈大火見物〉一作中敘述到「最令人痛心的是看到一對剛生產完的母子的屍體」。然而，隔年的5月，川端發表了以地震後的淺草公園避難所為舞台的小說〈天空中的移動燈光〉。這部作品的主角們的言行舉止卻沒有任何一絲陰影存在。這個意欲超越不幸的作品主題應可被視為是川端文學「萬物一如・輪迴轉生」這個重要思想開端的開端。

關鍵字：川端康成、關東大地震、救贖、萬物一如・輪迴轉生

受理日期:2021年 08月 31日

通過日期:2021年 10月 29日

DOI:10.29758/TWRYJYSB.202112_(37).0006

Redemption in Kawabata Literature : The Case of Works Related to the Kanto Earthquake

Huang Tsui-O

Professor, Department of Japanese Literature, Fu Jen Catholic University

Abstract

The Kanto Earthquake of September 1, 1923 was the first major disaster in the history of earthquake observation that killed more than 100,000 people. In the face of such a disaster, it is easy to imagine how people were physically and mentally devastated. What is the function of literary works, which are considered to be the most effective in soothing the hearts of the disillusioned, at this time? With this question in mind, this study aims to examine how Yasunari Kawabata recorded the Great Kanto Earthquake and how he developed "thoughts" that transcended the suffering caused by such a disaster.

After the earthquake, Yasunari Kawabata described in his work "The Great Fire" that "the most distressing thing was seeing the bodies of a mother and child who had just given birth. However, in May of the following year, Kawabata published his novel "Moving Lights in the Sky", which was set in the Asakusa Park refuge after the earthquake. In this work, there is no trace of shadows in the words and actions of the protagonists. The theme of this work, which is intended to transcend misfortune, can be seen as the beginning of Kawabata's major idea in literature, "the same as everything else, the reincarnation.

Keyword: Yasunari Kawabata, The Great Kanto Earthquake, Redemption,
All thing as one and Reincarnation

川端文学における「救済」 ——関東大震災関連作品をめぐって——

黄翠娥

輔仁大学日本語文学科 教授

要旨

1923年9月1日に起きた関東大震災は死者数が観測史上最大規模の十数万人に達した大きな災害である。このような災害で生き残った人々は精神的には完全に崩れてしまったのであろう。この中で、最も落ちぶれた人間の心を慰める役目をしている文学というのは、この時、どのように働いたのであろうか。本研究は、このような問題意識を元にして、特に川端の、関東大震災についての記述及び如何にその災難による「不幸」を超克したのかを追究したいのである。

大震災が起きた直後、川端は「最も心を刺されたのは、出産と同時に死んだ母子の死體であつた。」（「大火見物」）というような記述まで残している。しかし、翌年の5月に震災後の浅草公園内の避難所を舞台にした「空に動く灯」を書きあげた。この作品の主人公たちは、悲惨な避難所にいるにもかかわらず、翳のない振る舞いをしている。宛もこれを通して、「災難」を超越しようとするように見える。この主題は後の川端文学の「万物一如・輪廻転生」という重要な思想の発端だと見なされてよかろう。

キーワード：川端康成、関東大震災、救済、万物一如・輪廻転生

川端文学における「救済」 ——関東大震災関連作品をめぐって——

黄翠娥

輔仁大学日本語文学科 教授

1.はじめに

古くから、自然災害は相次いで起きている。文明社会となった現在でも、このような災害から逃げられない。地球温暖化による森林火災や洪水が世界各地で頻繁に発生している一方で、地震によっても、相変わらず、甚大な被害に遭遇し続けている。こうしたなか、2020年から広がる新型コロナウイルスにおいては、全世界が奈落の底に突き落とされている。無論、自然災害に対して、文明社会が尽力して科学技術の総力を発揮させ、解決方法を工夫するのは言うまでもない。むしろ、人類の文明発展の大きな要因の一つが、自然災害からの脱出を目指そうとするものであるぐらい、自然災害は人類の生存上での試練的な存在だと言える。しかし、現代文明の表象として存在している科学技術がどんなに進んでも、限界があるようである。即ち、文明は高度に発展しているにもかかわらず、人間は相変わらず心身においては、少しも落ち着くことが出来ないでいると言える。新型コロナウイルスを例にしよう。ワクチン開発を始めとする各種の、ウイルスに対するブロックと殲滅の手段を工夫しているが、これと同時にウイルスも速いスピードで変異し続けている。このように、今日の人間は全くの悪戦苦闘の状況に陥っている。そして、例え、将来完全に抑えることが出来たとしても、人間の長い歴史を見れば、また、他のもっと狂猛な新しい疫病が登場してくるに違いない。このように、人間を間断なく苦しんでいる状況から解き放つには、科学技術に頼ると同時に他の、精神を慰めて、落ち着かせる手段も講じるべきであろう。

ここにいわゆる形而上的な分野--哲学、芸術、文学、宗教などの天

職と使命が出てくるのではなからうか。この中で宗教はもっとも人間の心を慰める力を持つと言える。しかし、宗教的な理念を取り入れて作品化するような文学こそが、より普遍的に読者から共鳴を受けるであろう。

日本に絞って論ずれば、日本の近年来の一大惨事は 2011 年に発生した東日本大震災だと言える。この大震災をめぐっては、各分野にわたって、痛みを癒す方法や、事前に防ぐための戦略を模索しているが、特に文学においては、震災後の様々な社会問題や政府による解決政策や出版物による放射能被害の披瀝、また、エコフェミニズムの視点から原発文学を読むという研究議題がブームにもなっている。無論、ある程度の成果は出ている。しかし、年月がそれほど経っていないため、具体的に災害から学んだものは何であろうか、どのような顕著な文化現象が誕生してきたかなどについての追究や整理はまだ全面的に把握されていないと言える。それでは、ほぼ百年前の関東大震災はどうであろうか。百年後の今日においては、依然として慰められ、癒されることが出来たのであろうか。

本研究は、このような問題意識により、関東大震災を取り上げ、当時の文学者や文化人はどのように大震災を見ていたかということについて探究し、この災害とその後に現れた、文学が中核になっている文化的な思惟を垣間見ようとするものである。この中で、特にもっとも緊密的に災害を文学精神と結び付けた川端文学を取り上げ、作者が如何に関東大震災について記述し、また如何にその災難による「不幸」を超克したのかを追究したいのである。

2. 関東大震災と文壇

1923 年 9 月 1 日午前 11 時 58 分、東京をはじめ、神奈川、千葉、静岡等の各県にわたり、震度 6、マグニチュード 7.9 の関東大震災が起きた。翌日の『東京日日新聞』によれば、「安政以来の大地震」という見出しが現れたほどの大きな災難であった。無論、東日本大震災というマグニチュード 9 で、10 メートルの防潮堤を超えて、町を

飲み込んだり、放射能が漏洩したこの津波による生態への破壊などの惨事には及ばない。とはいっても、首都圏という人口密度の高い地域と、火災により観測史上最大規模の死者を出した大きな災害で奈落の底に落ちた。生き残った人々もまた、大きな精神的な衝撃を受けた。そのため、政府や一般社会の人々による様々な救済活動が無論盛んに行われた。しかし、この中で、最も落ちぶれた人間の心を慰める役目を担っていた文学というのは、これらの問題をどのように把握し、傷つけられた人間を慰め、未来を切り開こうとしたのであろうか。これは注目される議題であろう。

関東大震災直後に、震災当時の状況を語った作家は多かった。例えば、鈴木三重吉、若山牧水、寺田寅彦、野上彌生子、永井荷風、田山花袋、徳田秋声、芥川龍之介、正宗白鳥、宮本百合子、谷崎潤一郎などの作家による震災記述がその頃続々と登場した。大本泉氏は、震災の惨めな様子を生々しく伝えた内容を以下のように例挙している。「昨日までの文明が跡形もなく消え失せて、喪失感を覚えた。」、「下町の方から入道雲のような煙が立ちのぼった。」、「今の東京大学病院を含めて薬品類が出火の原因源となった例が多い。」、「通信手段が断たれて不安が増長した。」、「街中に焼死体が横たわっていた。」、「流言飛語が、生活の不安を増幅させた。」¹といった具合である。

直接に大震災体験を記録したルポルタージュも無論たくさん登場した。そして、震災後に起きた事件をめぐる著作も少なくなかった。特に、震災後に起きた朝鮮人虐殺、大杉栄らの甘粕事件、平沢計七らの亀戸事件などに言及した作品もたくさん登場した²。当時の文

¹ 大本泉「関東大震災と近代文学—芥川龍之介と正宗白鳥を中心として—」『仙台白百合女子大学紀要』17、P.11-18, 2013

² 朝鮮人虐殺事件については、徳田秋声の「ファイアガン」、江口渙の「車中の出来事」、前田河広一郎の「最後に笑ふ者」、秋田雨雀の「骸骨の舞跳」、越中谷利一の「一兵卒の震災手記」、藤森成吉の「草間中尉」などがある。大杉栄事件は特に『改造』大正12年11月号の「大杉栄追想」特集に多くの文学者が寄稿した。平沢計七ほか9名社会主義者が9月5日に刺殺されたという亀戸事件については小牧近江、金子洋文らの種蒔き社によって『種蒔き雑記—亀戸の殉難者を哀悼するために』（大正13.1）第一冊が出された。

壇³では、『白樺』をはじめ、多くの雑誌が廃刊、または休刊となり、出版ジャーナリズムが一時的に解体された。菊池寛が翌月の『中央公論』10月号の特集「前古未曾有の大震・大火惨害記録」に「災後雑感」を寄稿したように、「我々文芸家にとって、第一の打撃は、文芸と云うことは、生死存亡の境に於いては、骨董書画などと同じように、無用の贅沢品であることを、マザノと知ったことである。」と悲観的に感想を述べたのもある。これらは、震災当時の悲惨さ、震災による落胆の実体験やその後起こった事件の暴虐、残忍性及び文壇の将来性への懸念についての記述ばかりである。

しかし、それにもかかわらず、震災を諦観的にみている作家も少なくなかった。例えば、まず里見弴のような、芸術には依然として尊い働きが存在すると主張した作家もいる。里見弴の「珠は砕けず」(『時事新報』大正 12.9.28 夕刊)によれば、「関東に大震災が起つて、有らゆるものを破壊し尽したといふ。復興すべしといふ。而も予は深く信ずる。---芸術には目に見えないほどのひびすらなかつたのだ、と」「記せよ、芸術はピリッとも損んではゐないのである」と言う。これは前述した菊池寛の悲観論とは違って、芸術の価値は天災地変にも動じないという主張である。また次に、震災をより前向きの眼差しで見ている谷崎潤一郎⁴も紹介すべきであろう。彼には震災後のひどい状況を取り上げた小説はほとんどないが、「東京をおもふ」(『中央公論』昭和 9.1-4)などのエッセーにおいて、「地面に裂け目が出来た、路の端が谷の方へ崩れ始めた」「東京横浜は殆ど灰燼に帰してしまっただろう」という想像じみたように淡々と述べたあと、すぐ、「しめた、これで東京がよくなるぞ。」と期待にあふれた発言が登場している。何故ならば、震災前の東京には「泥濘と、悪道路と、

³ 浦西和彦「関東大震災と文学」(『國文學:解釈と教材の研究 34』1989)P.94-100。
さらに前田潤『地震と文学』(笠間書店、2016)及び鈴木斌「関東大震災と文学—表現のダイナミズムへ」(『世界文学』2012、P.1-10)からも多大な示唆を得た。

⁴ 田鎖数馬「関東大震災と文学—芥川龍之介と谷崎潤一郎」(『高知大國文』2014)P.1-27。

不秩序と、險悪な人情の外何物もない」からである。したがって、「今の恐ろしい震動で一とたまりもなく崩壊し、張りぼての洋風建築と附け木のやうな日本家屋の集團が痛快に焼けつゝあるさまを想ふと、サバ／＼して胸がすく」、この震災を機に「焼け野原に鬱然たる近代都市が勃興する」⁵と期待するようになったのである。

しかし、震災をもっとも文学的に描写しているのは芥川龍之介であろう。芥川龍之介⁶は震災の翌月に四つの地震にかかわる文章--「大震日録」(『女性』1923.10)、「大震雑記」(『中央公論』1923.10)、「大震に際せる感想」(『改造』1923.10)と「妄問妄答」(『改造』1923.11)を發表した。「大震日録」は9月1日と翌日の混雑さを簡単に記述したものである。「大震雑記」においては、ある焼死した死骸を「足を伸ばしてゐた。手もまた覚悟を極めたやうに湯帷子の胸の上に組み合はせてあつた。これは苦しみ悶えた死骸ではない。静かに宿命を迎へた死骸である。」⁷と悲惨な地震の現場を美化しようとしたり、人間の尊厳を守ろうとするかのような努力が見られる。また、皇居の前の濠で泳いでいる人間の風景を描いている。「突然濠の上から、思ひもよらぬ歌の聲が起つた。歌は『懐しのケンタツキイ』である。歌つてゐるのは水の上に頭ばかり出した少年である。僕は妙な興奮を感じた。僕の中にもその少年に声を合せたい心もちを感じた。少年は無心に歌つてゐるのであらう。けれども歌は一瞬の間にいつか僕を捉へてゐた否定の精神を打ち破つたのである」⁸という。即ち、この混乱、荒廢、悲惨な環境においても、やはり、その中から微光だとしても、将来への希望を見出すことが出来るという趣旨である。次に「大震に際せる感想」においては、当時の震災天譴説に反発している。「自然は人間に冷淡なる。されど人間なるが故に、人間たる事実を輕蔑すべからず。人間たる尊厳を拋棄すべからず。…汝の父母妻子を始め、隣人を愛するに躊躇することなかれ。その後尚余

⁵ 「東京をおもふ」(『谷崎潤一郎全集』第21巻、中央公論社、1983.1)P.12-13

⁶ 同注4

⁷ 「大震雑記」(『芥川龍之介全集』第10巻、岩波書店、1996.8)P.145

⁸ 同注7。 P.146-147

力あれば、風景を愛し、芸術を愛し、万般の学問を愛すべし。…同胞よ、冷淡なる自然の前に、アダム以来の人間を樹立せよ。否定的精神の奴隷となること勿れ」⁹と前向きの人間性の確立・強化の重要性を強調した。最後の「妄問妄答」においては、前述した菊池寛の「文芸無用論」に対して「芸術は人生の底へ一面に深い根を張つてゐるんだ。--と云ふよりも寧ろ人生は芸術の芽に満ちた苗床なんだ」¹⁰と芸術の価値を固く主張している。

このように、震災をめぐって、各作家はそれぞれの見方を示しており、ネガティブ派の破滅感を抱いた人もいれば、ポジティブ派の暗闇の中から希望の光を見出した作家の中には、震災から衝撃を受けて、文学創作の理念及び生き方を支える哲学まで生み出した作家もいた。しかし、直接に作品化して、それを通して、希望の光を表わしたその第一人者は、たとえば、やはり川端だと言える。以下は、川端が大震災の状況をどのように文学化したかを探究しよう。

3.川端文学と関東大震災

震災直後、川端は芥川龍之介と連れ立って、一週間も焼け跡を歩きまわった。二か月後の11月20日の日記によれば、地震に際して、川端は激しくみち子の身を案じ、品川が焼けたと聞いては、みち子が品川に家を持っているため、今、どうなっているかを心配している。「我、幾萬の逃げ惑ふ避難者の中に、ただ一人みち子を鋭く目捜しぬ。」¹¹というように焦ってばかりいた。後の「文學的自叙傳」においても、「私は多分に亡國の民である。震災の時の亡命行じみた罹災者の果しない行列ほど、私の心をそそつた人間の姿はない。(中略)親なし子、家なし子だつたせゐか、哀傷的な漂泊の思ひがやまない。」¹²と述べているように、大震災による衝撃がどれほど大きかったか

⁹ 「大震災に際せる感想」(『芥川龍之介全集』第10巻、岩波書店、1996.8)P.152-154

¹⁰ 「妄問妄答」(『芥川龍之介全集』第10巻、岩波書店、1996.8)P.168

¹¹ 「獨影自命」(『川端康成全集 第三十三巻』P.349。『川端康成全集 補 卷一』にも載せられている。P.587)

¹² 「文學的自叙傳」(『新潮』昭和9年5月号、『川端康成全集 第三十三巻』

が伺える。1929年(昭和4年)12月から翌年2月まで『東京朝日新聞』夕刊に連載した『浅草紅團』においては、当時の被害状態が詳しく紹介されている。この作品によれば、当時、本郷に下宿住まいの学生だった作者は、昔から浅草好きのため、大震災が起きてから二時間と経たないうちに、友達と二人で浅草の様子を見に行ったことが記述されている。例えば、十二階の塔は首が折れた。見物が大勢登ったから皆振り飛ばされた。それで、瓢箪池にも死骸がうぼうぼと浮いていた。浅草寺境内には避難者が溢れていた。浅草の裏にある富士尋常小学校が焼け落ちなかったため、多くの罹災者はそちらに住まわされたというような光景を目撃した、¹³など。

しかし、以上のような惨めな場面や衝撃、焦燥などの気持ちを述べた作品以外に、「大火見物」、「空に動く灯」、「孤児の感情」などの作品ではまた違う風景描写が出て来る。まず、前述した、母子の死体を目撃したシーンのある「大火見物」に戻ろう。

3.1 「大火見物」

『文藝春秋』1923年11月号に載せた「大火見物」¹⁴は即ち、震災の二か月後の作品であるが、この作においては、川端は震災の悲惨さを目撃しながらも、人間の振る舞いや自分のおい立ちへの連想などを語り続けている。まず、母性愛のことであるが、「こんどの大地震の非常の場合に、最も強く現れたものは、母の愛であると云ふ。女は弱い、母は強いと云ふ。私は、被服廠の廣場に積み重った死骸や、大河に浮んだ死骸にも、その現れを見た。」(P.7)という。まず、地震の時、主人公は大したことはなかろうと思って、二階にずっといたが、そのうち、瓦の落ちる音が激しくなったため、階下に下りた。見ると下宿の老女は必死に長患いの娘を抱き、門口でへたばっている。そして、姉娘も自分の子供を胸にしっかり抱き、家からや

1983.8)P.96

¹³ 「浅草紅團」(『川端康成全集 第四巻』1981.9)

¹⁴ 「震災文章」と題した同誌(『文藝春秋』)には、ほかに、横光利一の「震災」、菊池寛の「災後雑感」などの文章がある。(「大火見物」、『川端康成全集 第二十六巻』1983.5)

や遠くへ逃げた。主人公は母娘がそれぞれ自分の娘を抱いて、夢中で飛び出したのを面白く見ていた。と同時に「非常時に現れる母性愛は、尊いと云へば尊いが、自愛と一にして二に非る本能的なもので、母の知らない私なぞから見れば、今回見聞したその現れは動物的な感じがし、人間は巧く出来てゐるなど造化の妙を感嘆する心持が多かつた」(P.8) というように、混乱な状況においても、作者は親子における緊密な絆や造化の妙に目をつけている。

また、前述したように、浅草の死体収容所と吉原と被服廠と大川とでの幾万の死体の中で、「最も心を刺されたのは、出産と同時に死んだ母子の死體であつた。」(P.8) というような記述を残した。しかし、作者はその後すぐ「私はそれを見て空想せずにはゐられなかつた。母が死んで子供だけが生きて生れる。人に救はれる。美しく健かに成長する。そして、私は死體の臭氣のなかを歩きながらその子が戀をすることを考へた。」(P.8) と付け加えたように、悲惨な死亡の場面に対しても、美しいストーリーへの空想に耽つてばかりいる。これは前述した芥川龍之介による悲惨な震災現場の美化に類似している。だが、この感想は前述した「母の知らない私」という表現と読み合わせれば、川端の孤児生涯を彷彿させることもあるのではなかろうかと思われる。もう一つ出産に関する記述がある。上野図書館に避難中のある美人が出産して、十日ばかりして、美人の夫でもなく、身寄りでもないある立派な男に母子共に引き取られていったことを聞いて、「この話は私の空想を楽々とさせ、妙に私を快くした。」(P.8) というように、大震災の悲惨な状況に面して、主人公は常時には出て来ない人間の突端な行動や考えなどに気づいたり、美的に解釈したりしている。このように、川端は震災自体にもっぱら気を取られたのではなさそうであり、かえって距離を持って、災害を見つめている姿勢を取っているのがはっきりと窺える。何故、川端はこのように余裕を持っていたのであろうか。この理由を探究する前に、まず次の作品を分析しよう。

3.2 「空に動く灯」

震災の翌年の 5 月に震災後の浅草公園内の避難所を舞台にした「空に動く灯」¹⁵が書きあげられた。この、主に三つの挿話からなる作品は、震災後の収容場の状態について叙述したもので、それぞれ乞食夫婦、素行の不良な兄弟と自由放胆な恋愛をしている女性が主人公である。この三人は悲惨な避難所にいるにもかかわらず、翳のない振る舞いをしており、宛もこれを通して、「災難」を超越しようとするように見える。

最初の挿話では、震災後の浅草公園の裏に、コンクリート三階建の小学校が一つ焼け残り、その小学校の訓導と、友人が屋上で震災について語り合いながら、人間の救いは種族存続への努力よりも人間と自然界の区別を無くすことにあると結論付けた。

大體人間は、人間と自然界の森羅萬象との區別を鮮明にすることに、永い歴史的の努力を續けて來たんだが、これは餘り愉快なことぢやないよ。人生を空虛に感じる心の大半は、そんな努力の遺傳から湧いて來るのぢやないかしら。何時かは人間が、これまでの努力の道を逆戻りに歩き出すかもしれないと、僕は思ふんだ、空に投げた石が、力がつきると共に地に落ちて來るやうにね。そして、この逆戻りした道が行き着く終點は、多元にして一元の世界だと思ふね。そこに君、人間の多くの救ひがあるんだ。今度の地震くらゐならいいさ。なぜだと言つて、幾ら人間が面喰つたからつて、ああ、人間とはこんなに儂いものかと思つて全人類が首釣りをしたといふほどのことぢやないからね。厭世自殺どころか、却つて命一つの尊さを知つた。地震は少數の人の命を奪つたし、人生を暗くしたかもしれないさ。しかし人類の存續は嚴として犯されてゐないだらう。(下線筆者。P.111-112)

というように、逆説的な地震への観点を披露している。即ち、人間の存続はけっして、地震のような災害には阻止されることはない

¹⁵ 「空に動く灯」(『我観』1924年5月号、『川端康成全集 第二巻』1982.12)

いうことである。さらに万物の区別を無くすことで、人間は始めて救われるという主旨を主張している。屋上にいるこの二人はさらに次のように補足した。

人間を守って死と戦ってくれてゐる騎士は、本能的だから無意識的な場合もあるが、人類存続の信念だよ。この種族存続の信心が、人間滅亡、地球滅亡の日には役立たなくなる。(中略)人間が、ペンギン鳥や、月見草に生れ變るといふのでなくて、月見草と人間が一つのものだとうふことになれば、一層好都合だがね。それだけでも、人間の心の世界、言ひ換へると愛は、どんなに廣くなり伸びやかになるかしれやしない。一元にして多元、萬有靈魂にして一神...(P.113)

とあるように、前述した主旨をさらに展開させている。即ち、災難をどのように超克すればいいかと質問をしたのに対して、万物における区別を無くすという答えを提出した内容である。この災害また死などの超克のための「思想」を最初の段落で掲げてから、次の三つのストーリーを通してこの思想を例証、闡明したのである。

3.2.1 乞食夫婦¹⁶

小学校は罹災者を収容する場所になった。四十日間位経ってから、避難者がまだ五六十世帯二百人ぐらい残っていた。作品の第二章と第三章は三つの挿話からなり、第一章の哲学が具体化されたものである。まず、避難者の乞食夫婦の話であるが。他の避難者の家族的閉鎖性とは違って、乞食夫婦は礼儀正しくのんびりしているのである。

人が減り出すと間もなく、しかし、置き残されねばならない人々は、焼跡からまだ火の匂ひの残つてゐるトタン板を拾ひ集め、藁箆やぼろ布を見つけて、それを屋根にし壁にし、家族家族の巢を作り始めた。傷だらけのコンクリートの壁の教室の中に、神経を刺し殺すやうな焼けトタンの乞食小屋が

¹⁶ この乞食夫婦をめぐる出来事は『淺草紅團』においても記述されている。(『川端康成全集』第四巻、P.107-108)

立ち並んだ。家族それぞれで隠れた生活を営んだ。それは寒いからでもあらう。

ところが、乞食夫婦は相變らず筵一枚の上に子供ところがつてゐた。これも外の者と變つてゐる一つである。そしてある夜ある夜に、女房が子供を抱いた夫婦づれで、三階か屋上庭園へ静かに出て行くのであつた。そこから子供の泣聲が聞えてくることもある。最もよく禮儀を心得た夫婦かもしれない。(下線筆者。P.118)

即ち、冒頭で、人間と自然界の森羅萬象との區別を鮮明にすることはあまり愉快なことではない、何故なら、人生を空虚に感じる心の大半はこの理由によるからだとの主張はこの、一般の世帯と乞食夫婦との対照を通して具現化されたのである。人間の強い因習とは対照的に、乞食夫婦は震災からの被害をそれほど感じていないし、おおらかで、優雅的に振舞っているのである。このように、わざわざ最下級の乞食を出して、一般の、家や財産観を持っている人間と対照させたのも川端の独特な「思想」だからこそ現れたのであろう。

3.2.2 職人風の兄弟

避難所に来ているある職人風の兄弟は、罹災者の中のある子供が死んだ時、熱心に香奠を集めて廻った。そのため、一人残らず知り合いになり、誰彼なしに向かつて朝夕の挨拶をしたりするようになった。そのため、避難者の幹事に選ばれた。「慰安の百藝大會を催すと言つては、年増女の隠し藝をしつこく詮議してみたり、納骨堂が出来たと聞いては吉原詣りの會員を募つて若い男を笑はせたり、さうかと思ふと、闇にまぎれて學校の庭の梅干を盗みに行つたりして、とにかく笑ひを忘れさせなかつた。」(P.122)というような朗らかな人物像である。しかし、ある夜、この兄弟とほかの三四人の男が警察に縄を打たれて連れて行かれた。賭博現行犯だからである。

この職人風の兄弟には不良性の一面があるにもかかわらず、避難所では周りの人々に暖かさを与える中核的な人物である。惨めな避難所においては、このような人物がいたからこそ、大震災に齎され

た苦痛からしばらく逃れることが出来たと言える。作者はここにおいても、前述した乞食夫婦の件と同じように、普通の社会ではなかなか認められないながら、生命の光を失っていないキャラクターを設けている。震災だからこそ、こうした意外な美しい発見が出来たとも語る意図があるのであろう。

3.2.3 お花の恋愛

母親と避難所に来たお花は、小学校の教員の教え子の姉であり、避難所で言い寄る男と放縦な性関係を結んだ。

お花は自分の清浄をなんの考へもなしに投げ棄てると、わがものといふことを二十日ばかりの間忘れてゐた體が生き生き蘇り、心が花やいで來た。地震以來の汗と垢を洗ひ落として、肌着を新しくした心持だつた。灯が消えた後の夜なぞ、トタン板一枚向うの男が一心に戀しいことがあつても、言ひ寄る男があれば片つぱしから自分のものにする自由で放膽な女として自分を眺めることが、お花を喜ばせるやうになつた。大地は動き、家は倒れ、見渡す限りが焔の海であつた日の記憶と、西洋手拭の赤い一筋さへが懐しい程のこの生活とに對して、勝氣で大膽な娘は無意識のうちに反抗してゐた。この時突然開けた女の新しい世界は、身を繞つてお花をもそこに置きたがる不幸と悲慘とから飛び立ち得る若々しい翼を持つてゐることを、お花に知らせたのである。(下線筆者。P.124)

即ち、災難後に続いた貧困の生活に對抗しようとする手段の一つとしては、あの異性、この異性との区別をしないことを通して、大震災で心身ともに崩れそうになつたお花は、それによって、新しい命を取り戻し、自由奔放な生き方を見出すことがやっと出来たという趣旨である。

以上三つのストーリーからは人間はいかなる災難に遭遇しても、生きていくエネルギーに満ちる可能性が与えられ得ることが見えてくる。例え、どのような身分の低い人間であっても、この生きる力は少しも劣らない。逆にこのような人間だからこそ、予想外な生

命力を持っているのである。さらに、その中から、普段ならそれほど現れてこない人間愛も存分に溢れて来た。また、これら生きるエネルギーによって、はじめて不幸に対抗できたとも言える。あながち、災害というのは絶対的な悪とも言えないだろう。

3.3 「孤児の感情」

「孤児の感情」¹⁷という 1925 年の作品においては、主人公が 4 歳の時に両親が亡くなったため、彼と 1 歳の妹は別々の家に引き取られて大きくなった。そのせいか幼いころはお互いにそれほど親しみを感じなかったが、大人になり、その妹に縁談の話が持ち上がった。相手の男は東京にいる。妹はその人に会ってみるために、東京へ来て主人公の下宿に泊まることになる。それで初めて、二人の間にそれまでにはなかった血縁関係から生まれる「家族的」な交流が出来るようになった。妹は毎晩二時間先に寢床に入る。二時間後遅れて主人公が寢床に入ると、妹は静かに寢返りをして、主人公の方を向いた。このことに対して、主人公は「男と床を並べて、よく平気で眠れたもんだ。妹といふ概念に安心してゐるのだ。(中略)人間の感情の因習を概念的に信じることに過ぎない。」(P.166-167)と言った。そして、関東大震災の当時の出来事を思い出した。関東大震災が起きたとき、「私」は下宿から近くの森の中に逃げ込んだ。地面に蒲団を敷いて木の枝に蚊帳を釣って寝ていたら、下宿の若い人妻が赤子を連れて「私」の蚊帳に入って、「私」と一枚の夜具の中に寝てしまったという筋のことを語っている。

私はその時空想したのであつた。彼女も傍の人々と同じやうに、私と彼女とは夫婦ではないといふ記憶を失つたとしたら。会社員の妻であるといふ記憶も失つたとしたら。そして、世の中の人間が悉く記憶力と名づけられた頭の働きを失つたとしたら。夫は昨日のわが妻を忘れ、妻は昨日のわが夫を忘れ、親は昨日のわが子を忘れ、子は昨日のわが親を忘れたと

¹⁷ 「孤児の感情」(『新潮』1925年2月号、『川端康成全集 第二巻』1982.12)

したら。その時は、人間は悉くみなし兒となり、ここは「家庭のない都市」となるだらう。---誰も彼もが私と同じ身の上になるだらう。(P.167-168)

とあるように、災害に齎された傷害は人間と人間とが隔たりを無くした親密な絆を結ぶことではじめて癒されるのだという趣旨であろう。即ち、この作品は人間の、因習からの解脱というのが主題と解釈してもよかろう。因習に拘らずに、何の隔たりもなく、自由自在に震災に齎された不幸から逃れることが出来た事への安堵感と言えるだろう。何故なら、この作品においては、さらに父母の不在に対して、次のように述べているからである。

風で走って行ってしまった枯葉をすっかり忘れて、二度と
思いださないとしたらどうだ。それよりも、最初からその枯
葉を僕が一目も見なかったらどうだ。僕というものには、そ
の枯葉がないことになる。無いといふことの方が分るかい。
無はあらゆる存在より廣々と大きい自由な實在だといふこと
が。感じ方一つでは、僕が見なかった一枚の枯葉の感じはこ
の青空よりも大きいことにならないとも限らない。(P.171)

これによれば、父母の「死」は「存在しないこと」ではなく、「あらゆる存在より大きい自由な實在」という価値を有する「無」ということになっている。ここでは、有に拘らず、無というもっと広い世界に憧れるということが述べられている。

4. 「救済的な思想」の源流

以上述べてきたように、川端の関東大震災をめぐるいくつかの作品によれば、災害の中から生きる希望を見出すことが出来たようである。また、さらに関東大震災に直面した際に、作者は意図的に作品を通して、当時の自分と他の人々の苦痛を癒そうとすることを模索していたことが分かる。何故、このように、悲惨な震災に距離を持って見つめる姿勢が出来たのであろうか。この心理的な「余裕」が出来たことの背後にはどのような理念が潜んでいるのであろうか。

無論、震災から受けた衝撃という原因が最も大きかっただろう。天災異変は人間の思惟に直接に大きい影響を与えることは言うまでもない。これはまさしく芥川龍之介が「震災の文芸に与ふる影響」¹⁸という文章で言っている通りである。

災害の大きかっただけにこんどの大地震は、我我作家の心にも大きな動揺を与へた。我我ははげしい愛や、憎しみや、憐みや、不安を経験した。在来、我我のとりあつかつた人間の心理は、どちらかといへばデリケートなものである。それへ今度はもつと線の太い感情の曲線を忍がいたものが新に加はるやうになるかも知れない。(中略)我我は在来のやうに、外界に興味を求めがたい。すると我我自身の内部に、何か楽しみを求めるだらう。...つまり、乱世に出合った支那の詩人などの隠棲の風流を楽しんだと似たことが起りさうに思ふのである。(下線筆者。P.162-163)

とあるように、芥川同様、川端も震災によって、いろいろと思考させられたのであろう。

こうした川端の思考には三つの要素が考えられる。一つには、震災という非常時からの刺激の外に、無論、川端自身のおい立ち--幼児期から死に直面させられたこと--とも無関係ではないと思われる。前述した「大火見物」の、母親達が無我夢中に自分の子を抱いて地震の最中にある自宅から逃げた場面について、「母の知らない私なぞから見れば、...」(下線筆者)と感想を述べている。即ち、母親の本能的な、子を守ることへの讃えの中から、自然に自分が孤児であるおい立ちに触れるようになる。さらに、「孤児の感情」という作品で、幼いころ両親を亡くしたこと、別々の家に引き取られて大きくなった妹に兄である自分が何の隔たりもなく、平気で床を並べられた叙述から、関東大震災の当時の、赤子を連れた若い人妻と一枚の夜具の中に寝ていることに触れるようになる。さらに前述した「文學的

¹⁸ 「震災の文芸に与ふる影響」(初出未詳、『芥川龍之介全集』第10巻、岩波書店、1996.8)P.162-163

自叙傳」においても、罹災者の果しない行列を見ると、「親なし子、家なし子だつたせゐか、哀傷的な漂泊の思ひがやまない。」と洩らししている。即ち、大震災の見聞による新しい感動的な体験を無意識にも自分の孤児の経験と関連させるのである。逆に言えば、自分の孤児という孤独の体験によって、大震災という非常時の、人間と人間との触れ合いに対して、より興味津々に観察したりしたのだと言える。即ち、より諦観的な見方で震災中の人間関係を看取っているのである。

もう一つの要素は日本の伝統的な自然との接し方だと思われる。いわゆる日本古典文学に頻繁に出て来た無常観とそれに醸し出された美意識による日本人の自然観である。渡辺正雄氏も「近代における日本人の自然観——西洋との比較において」という文章で例として鴨長明の『方丈記』を挙げ、自然との接し方について述べている。火事、地震、つむじ風、洪水、飢饉、悪疫の流行などの自然の災害と、人の世の栄枯盛衰を数え上げて、世のはかなさを述べながら、結局人里を離れた所に庵を結んで、自然の懐に入ることに安住の道を見出したというのである。渡辺氏によれば、これは典型的に日本的な自然との接し方だと言う。即ち、自然に破壊された人間はさらに自然の懐に戻って慰めを求めるというのである。渡辺氏は清水幾太郎氏の指摘を引用した。いわゆる関東大震災の時の人々の反応も鴨長明のそれに通じるものがあったという。家が焼かれ家族を失った人々も、やがて地震が静まり、焼け跡の大地に座って、夕日が西の空を真っ赤に染めて沈んでいくのを見ていると、もうそこに言いようのない安らぎを感じてしまうのであるという。即ち、日本人は、人間を破滅させる「荒々しい自然からの救済」を「美しい自然への没入のうちに」見出してきたのであり、「暴力によって、突き倒された人間が美としての自然によって救い上げられるという循環の軌道を歩み続けてきた。」¹⁹というのである。渡辺氏はさらに源了圓氏の

¹⁹ 渡辺正雄「近代における日本人の自然観——西洋との比較において」(『日本人の自然観 縄文から現代科学まで』伊東俊太郎編 河出書房出版 1995.8.

「日本人の自然観」という文章の中にも類似の記述があると付け加えた。このように、日本人である川端は作品を通して、落胆したり、人間に苦痛を与えた自然を咎めたりせずに、素直に「現実」を迎え入れて、そこから逆に新しい人生の可能性を求めようという姿勢を強く現わしたのもこの日本人の伝統的な思惟の反映と言っては過言であろうか。

以上のような背景があって、最終的に川端特有の「万物一如・輪廻転生」²⁰という思想が誕生した。「万物一如・輪廻転生」というのは、不幸から逃がれる手段として、生と死、自分と相手などにおける境界線を無くすことだという思想であり、もともと仏教の輪廻転生の教えに由来したものである。川端はそこに日本の「草木国土悉皆成仏」の思想²¹を加味しながら、ギリシア神話などには花物語や動物・植物への転生の伝説があることにも気付き²²、結局「万物一如・輪廻転生」という川端独特の思想・文学理念を作り出した。この思想は頻繁に作品に登場している。例えば、

「空に動く灯」の冒頭においては、「日本でも昔は極楽詣りの空想と一緒に、愛らしい信仰が生きてゐたことがあつた。前世の王姫は現世の乞食であり来世の紅雀であり、その次の世の谷間の白百合である。現世の詩人は來世の佛であり、前世の白鼠であつたと言つた風のものだ」(P.111)というように「万物一如・輪廻転生」の趣旨に言及した。さらに翌年の「永生不滅」²³という文章では、「万物一如・輪廻転生」の意義を明らかに語っている。

P.361-362。)「自然災害への日本的対応」というタイトルで1976年に出来た『日本人と近代科学』(岩波新書)の中の「近代科学と日本人の自然観」という文章を一部分まとめた内容である。

²⁰ 羽鳥一英氏は「川端康成と万物一如・輪廻転生思想」(日本文学研究資料館『川端康成』有精堂1980.10 P.269-278)において、この思想の由来、趣旨及びかかわっている作品群などを詳しく紹介している。

²¹ 川端は「抒情歌」で近世の心学者布施松翁が一休禅師の歌の解釈において、「草木国土悉皆成仏祭」という言葉が出て来たと言及した。(『川端康成全集』第三巻、1984.7、P.482)

²² 「抒情歌」では西洋の文学からの影響があると述べた。P.484

²³ 「永生不滅」『文章倶楽部』(1925年1月号、『川端康成全集 第三十三巻』1983.8)

個人の死から人間を救出するには、個人と他の個人、一人の人間と外界の萬物との境界線を曖昧に暈すことが一番いいらしい。それなら、種族の死から人間を救ふには、人間族と他種族、人間と猿、人間と鶯、人間と鳳蝶、更に進んで人間と植物、人間と無生物、人間と水のやうな、液體人間と空氣のやうな氣體との境界線を曖昧に暈すことが一番いいのであろうか。(P.12)

しかし、以上述べてきたように、特に関東大震災をめぐっている大正期の作品はどちらかと言えば、「輪廻転生」よりも、「万物一如」の方に大きく傾いているのである。

一方「死の超克」の手段として大いに使われた「輪廻転生」を具体化したのは、1932年(昭和七年)に出来た「抒情歌」²⁴という作品を待たなければならない。「抒情歌」は、「私」という若い女性(竜枝)が、かつての恋人——後に「私」の愛を裏切って他の女性と結婚し、今はもう亡き人なのだが——に語りかけるという形の文体の作品である。恋人の裏切りに対する恨みや嫉妬などの追放は、人間と人間の境を曖昧に暈し、さらに範囲をより一層広げて、人間と動植物の区別も曖昧に暈すことによって実現される。竜枝は最後にはこの道理を悟り、亡くなった恋人を植物の中に見出すことを彼女の唯一の救いとするのである。

あなたを失つてからは、花の色、小鳥のさへづりも、私にはあぢけなくむなしいものとなつてしまつたのでありました。天地萬物と私の魂との通ひ路がふつつり斷たれてしまつたのでありました。私は失つた戀人よりも失つた愛の心を悲しみました。(P.489)

さうして讀みましたのが輪廻転生の抒情詩でありました。その歌に教へられまして、私は禽獸草木のうちあなたを見つけ、私を見つけ、まただんだんと天地萬物をおほらかに愛

²⁴ 「抒情歌」『中央公論』1932年7月号(『川端康成全集 第三巻』1984.7)

する心をとりにもどしたのであります。(P.489)

冥土や來世でああなたの戀人となりますより、あなたも私も
が紅梅か夾竹桃の花となりまして、花粉をはこぶ胡蝶に結婚
させてもらふことが、遥かに美しいと思はれます。(下線筆
者。P.499)

このように、竜枝にとっての唯一の救済は、「万物一如・輪廻転生」の実践である。しかも、禽獸草木という自然界のすべての存在から救われる道を見出したというのである。

「抒情歌」においては「万物一如・輪廻転生」という思想はすでに成熟した段階まで進んでいる。その前の段階の関東大震災に遭遇した時点では、震災に齎された死亡、喪失などに「万物一如」という理念を持って真正面から対応した。重複になるが、前述した「空に動く灯」の乞食夫婦、職人風の兄弟、お花の恋愛という三つの挿話では、それぞれの主人公が悲惨な避難所にいるにもかかわらず、翳のない振る舞いをしている。即ち、他人との隔たりを無くすことを通して、災害による被害から目を逸らすことが出来た。これはまさに「万物一如」の現れだと言える。さらに、「大火見物」になると、母子の死體という悲惨な死亡に対して、美しいストーリーへの空想に耽けているようになる。これは生と死、美と醜の限界を暈す手段だと言える。「孤児の感情」においても、大震災の際に人間同士の身分、所属などを暈すことを通して、自由自在の暮らしがやっと出来たことを例証したものである。さらにこの体験から、父母の不在に対しても、親子の絆に拘るという因習から解脱しかねないことまで触れるようになる。これらはすべて「万物一如」の理念の現れであろう。以上のように、関東大震災に関連する作品群から川端の「万物一如・輪廻転生」という思想の形成の経緯を垣間見ることが出来た。

5.おわりに

以上述べてきたように、川端の、関東大震災を背景にした作品群

においては、人間は災害によって倒されたどころか、逆に、自由奔放な生き方が出来た点が強調されている。即ち、災害から救いの道を作り出そうとしたのであろう。これは日本の伝統的な自然との接し方とは無論繋がっているであろうが、川端独特の「万物一如・輪廻転生」という思想に支えられたからこそ成就したものだとも言える。あるいは、逆に、川端文学は関東大震災によって、不幸と対抗できた「万物一如・輪廻転生」という思想を作り出したからこそ、はじめてパワフルな文学世界が展開できたとも言えるだろう。

川端は震災後の翌年の大正 13 年 10 月の『文藝時代』創刊にあたって、「我々の祖先が墓石の下にその屍を埋め西方浄土の永生を信じて安らいだやうに、我々の子孫は文藝の殿堂の中に人間不滅の解決を見出して死を超越するであらう。この雑誌はその殿堂に行く遙々遠い道一枚の鋪石である。」²⁵というように死の超克、人間救済という使命を宗教よりも文学の方に向けようと宣言した。即ち、川端は何度ともなく、文学の絶対性を強調している。このように、災害と文化的思惟の発展との因果関係を論ずれば、川端文学も有力な例証の一つだと言えるのではなかろうか。

テキスト

- 川端康成「浅草紅團」(『川端康成全集 第四巻』新潮社、1981.9)
川端康成「空に動く灯」(『川端康成全集 第二巻』新潮社、1982.12)
川端康成「孤児の感情」(『川端康成全集 第二巻』(新潮社、1982.12)
川端康成「大火見物」(『川端康成全集 第二十六巻』新潮社、1983.8)
川端康成<「文藝時代」創刊の辭>(『川端康成全集 第三十二巻』新潮社、1984.3)
川端康成「獨影自命」(『川端康成全集 第三十三巻』新潮社、1983.8)
川端康成「文學的自叙傳」(『川端康成全集 第三十三巻』新潮社、

²⁵ <「文藝時代」創刊の辭>(1925 年 1 月号、『川端康成全集 第三十二巻』1984.3)P.414

1983.8)

川端康成「永生不滅」(『川端康成全集 第三十三卷』新潮社、1983.8)

川端康成「抒情歌」(『川端康成全集 第三卷』新潮社、1984.7)

谷崎潤一郎「東京をおもふ」(『谷崎潤一郎全集』第21巻、中央公論社、1983.1)

芥川龍之介「大震日録」「大震雑記」「大震に際せる感想」「妄問妄答」
(『芥川龍之介全集』第10巻、岩波書店、1996.8)

参考文献

浦西和彦 1989「関東大震災と文学」(『國文學:解釈と教材の研究 34』)

大本泉 2013「関東大震災と近代文学—芥川龍之介と正宗白鳥を中心として--」(『仙台白百合女子大学紀要』17)

鈴木斌 2012「関東大震災と文学—表現のダイナミズムへ」(『世界文学』、世界文学社)

田鎖数馬 2014「関東大震災と文学—芥川龍之介と谷崎潤一郎」(『高知大 国文』)

羽鳥一英 1980「川端康成と万物一如・輪廻転生思想」(『川端康成』、日本文学研究資料叢書、有精堂)

前田潤 2016『地震と文学』(笠間書店)

渡辺正雄 1995「近代における日本人の自然観—西洋との比較において」(『日本人の自然観 縄文から現代科学まで』伊東俊太郎編 河出書房出版)